

## 平成24年度第2回宮崎県社会教育委員会議 議事録

期日：平成24年7月25日（水）

午前9時30分～12時

会場：（株）久保田オートパーツ

### テーマ1 「多様な主体による横の連携」について

**協議題** 社会教育関係団体や企業等が、相互の活動を連携させて、地域の教育力の向上を支援するための取組はどうあればよいか。

#### 森山議長

初めて久保田オートパーツを訪問したが、まさに「企業は人なり」という感じを受けた。社長の考え方が隅々まで伝わっており、特に社員の皆さんの素晴らしい対応に感動した。

私たちもいかに地域を育てるかを考えなければならないと思っている。そういう面で、今日は素晴らしい会社訪問をさせてもらい、よいヒントを与えていただいたのではないかと思う。

協議題の一つ目の「多様な主体による横の連携」について、昨年度、県教育委員会が実施された「地域教育ネットワーク会議」において、本日の協議題について非常に興味深い内容があるので、説明をお願いします。



#### 事務局

（平成23年度「地域教育ネットワーク会議」協議のまとめについて説明）

地域の課題について

（活動上の問題点）

- ・ リーダーとなる人材がない。
- ・ コーディネーターがボランティアをうまく活用できていない。
- ・ 特定の方がボランティアとなる状況がある。
- ・ 活動団体相互の情報交換ができていない。
- ・ 地域の活動について、話し合う場がない。

（改善方策・具体的な取組等）

- ・ ボランティア相互の「横の連携」が必要である。
- ・ 地域づくりに子どもを参画させる工夫が必要である。
- ・ 学校支援ボランティアが、生きがいきりにつながっている。

- ・ 地域から子どもへの支援ではなく、子どもの活動への貢献であり、子どもも協働することで、地域へ貢献することができる。

相互連携に関する課題について

(活動上の問題点)

- ・ 各団体の情報が少ない。(情報網の整備が必要)
- ・ ボランティア同士の連携が希薄である。
- ・ 活動団体相互の情報交換ができていない。
- ・ 地域の活動について話し合う場がない。

(改善方策・具体的な取組等)

- ・ 内容別にボランティアの募集を行っていく。
- ・ 身近に感じるネットワークづくりを図る。
- ・ 地域で何ができるのか話し合う機会をつくる。
- ・ 具体的な活動で相互のつながりを深める。

組織・団体の課題について

(活動上の問題点)

- ・ 関係団体間の相互理解が必要である。
- ・ 子ども会等の組織団体が減少している。

(改善方策・具体的な取組等)

- ・ 公民館を中心とした寺子屋学習を実施している。
- ・ 子どもたちへの活動支援を行うことにより、青年団活動が充実した。
- ・ 地域の魅力を子どもたちに伝え、企業として地域とのつながりを深めている。

## 森山議長

今の説明を聞いて、「地域」という概念をどう捉えるかということ考えた。そのステージの単位、例えば小学校単位にするか中学校単位にするか、もしくは行政区単位にするか、あるいは各集落単位か。これによって活動も変わってくると思う。

一方、組織については、リーダーが代わることによって弱体化することもあるので、持続するというのが一つの条件だと思う。

これから永続的に各団体が組織を活かしながら横の連携を図り、これからの子どもたちをどう育てるか、共通認識を持つことが前提であり、それからどういう組織をつくるかということになると思う。



## 藤崎委員

「地域」の概念については、その時その時の活動によって、広がったり狭まったりすると思っている。先ほどの説明の中で、地域の課題として、「地域の活動について話し合う場がない」という意見があったが、ネットワーク会議とか活性化会議とか、いろいろな会議はあるが、課題を出すだけになってしまい、何かを決めるとか、ゴールはどこにあるとか、具体的なアクションに繋がる内容があまりないような感じがしている。

具体的な実践を伴うものにしていく必要がある。

**横山委員** 佐土原町の自分の住んでいる地区では、高齢者と子どもたち、青年と一緒に参加できるように、これまでの盆踊り大会を今年から夏まつり大会にすることにした。盆踊りの練習も子どもを交えて親子で一緒にやっている。この会議で話し合ったり学んだりしたことを地域に持ち帰って提案をし、そして実行するようにした。当日の大会が楽しみである。

**森山議長** その地域の範囲は小さいのか。

**横山委員** 小さい範囲である。佐土原町の芸能祭りでの盆踊りが好評だったこともあり、私たちの地域からまず声を上げていくことにした。最初から広い範囲にしてもなかなか集まらない。最初は小さいところから始めて、横の連携を取りながら、どんどん輪を広げていこうと考えている。

**森山議長** これが伝統行事になって、みんなが集まってくると将来の夢がもてる。

**横山委員** それを期待している。地区の役員などは毎年変わるので、役員として学んだことは、多くの人に広げて共有していくことが大切だと思う。

**長鶴委員** 昨年、赤江地区で子育てフェスティバルを開催したが、もっと何かできないかということで、今年は地区全体での子育てということを核にしなが、関係のあるものをどんどん加えていくことにした。例えば、消防車に子どもたちを乗せて防災訓練を行い、子どもの頃から防災意識を育てる。そこに介護関係の方も来て、障害者サポートや介護相談を行う。なぜ子育てと介護相談かというと、子育てをしている人の中には、介護もしている人もいる。子育てフェスティバルに来た人が、介護のことも含めて相談し、肩の荷を降ろせば、子育てもうまくいくだらうと考えている。他にもお母さん自身の健康相談の場を設けたりするなど、関連するものを繋げて、みんなで子育てについて考える。子育てフェアという乳幼児と限定しがちだが、先を見据えて、子育てに関係することは一堂に会してみんな交流しようと考えている。活動に重要な関連性のあるものを引き寄せて、話し合うことでお互いの顔がわかり、情報交換ができる。関連するものを繋げるネットワークから広げて、横の繋がりができ、一つの関係になると感じている。

最初からこのような発想があったわけではないが、何とかして子育てのことをみんなで考え、手をつないでいくにはどうしたらよいかということから始まった。これを実行するためには、キーパーソンというかフットワークよくアイデアを出しながら動く人がいるということが大事になってくると思う。

**藤崎委員** 赤江地区の取組を参考にして、他の地区にも子育てフェスティバルが広がっている。小さな地域から大きな地域へと繋がり、市全体へ広がっていくのではないかと考えている。地域同士を繋ぐためには、情報を常に発信していくことが必要である。

- 長鶴委員** 活動をいかに周知するか、PRするかということが大切である。県立看護大学は、赤江地区子育てフェスティバルに共催という形で関わっており、当日はブースも設けている。地域貢献の一環として捉えている。
- 谷口委員** 地域婦人連絡協議会も地域の活動に積極的に参加している。PTAや青年団、地域の企業等と連携して活動していくという発想は良いと思う。地域を主体としている組織が企業などに「一緒に活動しましょう」と呼びかけていくことが大切である。
- 黒木委員** 都農神社の夏祭りは、小学生から大人まで、町が一体となって開催されている。連携した活動を行う際の参考になる点もあると思う。
- 森山議長** 行政、学校、地域が一体となる必要がある。年間行事で人が集まるのは素晴らしいことである。伝統行事・文化をもっている地域は強いと感じる。  
地域の教育力を高めるためには、連携が最も大事だと思う。行政、学校、地域のそれぞれの垣根が低く、何でも相談できる関係が望ましい。
- 宮本委員** 学校は、地域の拠点として大きな役割を担っていると思う。将来の地域を担う子どもたちに多くの方が関わっておられることは大切なことであると思っている。  
「地域教育ネットワーク会議」の報告があったが、このような会議を年間を通じて定期的で開催して、進捗状況を検討し、深化させていかなければならないと思う。年度当初にそれぞれの団体同士が情報を交換し、見通しをもって取り組めるようにする必要がある。  
子どもたちが、地域と関わり、いろいろな方と出会って学びを深めていくことは、キャリア教育の視点からも大事なことである。若い世代から生き方をしっかりと勉強する上で地域との関わりは大切なことである。
- 森山議長** 学校が積極的に地域に出向くところは、学校も地域も活性化すると思う。地域に開かれた学校への体制づくりが求められる。その例として、綾町の登館日は、地域と学校、行政が連携した取組である。
- 山田委員** 綾町では、子どもたちが「綾町子ども憲章」を機会あるごとに斉唱することで、浸透を図っている。登館日については、夏休みの登校日の一環として実施しており、小学生が地域の公民館に出かけて、いろいろな活動に取り組んでいる。この活動には、保護者、高齢者クラブ、婦人会、子ども会、民生委員・児童委員、教育委員会など多様な人が関わっている。続けていくことが大事だと思う。
- 森山議長** 綾町の登館日は、たくさんの方が関わられるように、今は日曜日に実施しており、地域全体で登館日を心待ちにしている。地域の人たちといろいろな体験ができる登館日は、学校も重要視している。

**鈴木委員** 串間市の学校でも実施しているが、親子会単位の取組なので、保護者と先生、自治会長が参加する程度で、行政が一緒になって実施しているのは素晴らしいと思う。

**テーマ2** 「人材の地育地活」について

**協議題** 子どもたちをはじめ、地域の方々が地域活動に主体的に関わり、地域に貢献できる人材に育てるための取組はどうあればよいか。

**森山議長** 協議の二つ目の「人材の地育地活」に入る前に、「県民総ぐるみによる教育の推進」について事務局から説明をお願いする。

**事務局** (「県広報みやざき」掲載の「県民総ぐるみによる教育の推進」について説明)

- ・ 県教育委員会では、子どもたちの一日の生活を、地域(県民)の皆様に支援していただく「学校支援地域本部事業」と「放課後子ども教室推進事業」を実施している。
- ・ 学校支援地域本部事業では、学校の諸活動の支援を、放課後子ども教室推進事業では子どもの安全・安心な居場所づくりのために登校時の「あいさつ見守り活動」など地域の皆様の協力をお願いしている。「できる人から、できることから」「子どものために『わたしも一役』」というスローガンの下に活動を展開している。
- ・ 委員の皆様からの御意見を今後の参考にしたい。

**白水委員** 以前、構造改革特区説明会に参加した際に、国はアイデアを求めているのだと感じた。課題は地域(現場)で発見され、その解決策も地域(現場)から生まれる。しかし、行政だけの対応では無理であり、県民の力を結集することが大事であると思う。

地域の課題解決のためには、子どもの頃から自治能力を育てることが大事である。自治能力を育てるためには、教育の仕組みが大切である。学校では児童会や生徒会の活動があり、地域では子ども会活動があるが、大人が準備してやる部分が多い。そこで、「参加する」「参画する」「連携する」「ネットワーク」の意味をしっかりと理解しておくことが大切である。

都城市の「おかげ祭り」は、祭りを教育、地域コミュニティの再生、伝承活動等と位置付けて開催されている。

この祭りを理解し、定着させるためには、地域の自治能力を高めておく必要がある。社会教育、学校教育の観点に自治能力の育成を含めてほしい。



**野口委員** 自分の体験としては、子どもを通して地域とのつながり・関わりができていたと思う。祭りなどは、大人から子どもまで共有できるものであり、このような核になるものを地域で立ち上げるという努力をしていく必要があると感じた。

**久保田委員** 人材育成ということであれば、対象を大人にするのか、子どもであればどの年代の子どもを対象にするのか、明確にする必要があると思う。

また、どのような機会に、どれぐらいの時間で行うのかなど、計画性のある取組が求められる。

**事務局** 「子どものために『わたしも一役』」というスローガンを掲げたのは、地域の方に対して、学校の敷居を低くするということと、学校に関わることで自分磨きの新たなチャンスが生まれるということを感じてもらいたいからである。広報・啓発のためのバッジやステッカーを作成して事業の促進を図っていく予定である。

**藤崎委員** 地域の方が子どもに関わっていただくことはありがたいが、その際、子どもの人権への配慮も必要になる。それを学ぶ機会でもあるという視点もあるとよい。

**鈴木委員** 学校支援地域本部事業が実施されている間は活動も活発に行われるが、学校から地域への発信が少なく、学校の敷居が高いと感じている地域の状況もあるので、広報・啓発キャンペーンは良いことだと思う。

学校行事も減ってきていると感じているが、そうなると子どもと地域の方が一緒に活動する機会も少なくなる。地域と学校が共に成長する場として行政からの働きかけもお願いしたい。

**宮本委員** 学校では、自治力の育成をめざして様々な活動に取り組んでいる。人材育成には時間がかかるので、小さい頃からの継続した取組が必要である。

佐土原地区では、多くの若者が地元に戻り、まちづくりの中心となつてがんばっている。地域に貢献できるということは、地域を愛していることに他ならない。地域を愛する心を育てるためには、地域を知る仕掛けづくりが大事であるし、大人が若者のモデルとなつて若者を育てていくような活動も必要である。

また、佐土原町では、地元の企業が地域貢献として、年間を通じて見守り活動を続けておられる。

**長鶴委員** 地域を愛する子どもたちを育てたいと思う。自分も宮崎に帰ってきて、何か宮崎のために役立ちたいという気持ちが強い。小さい頃から地域を愛する気持ちを培っていくことが人材を育成する上で大切である。

**岩田委員** 宮崎農業高校では、リーダー育成のためのキャンプを実施している。農業高校は、地域産業の担い手を育成するという視点で教育している。

学校としては地域に開かれた学校づくりという視点で、学校の持っているハード面、ソフト面を開放して、食育の指導や保育支援などに取り組んでいる。地域に貢献する子どもを育てたいと思っている。

**長 委員** 地域ではそれぞれ活動が行われているが、企画・運営をする人が少なくなってきており、参加者という立場の人が多くなっている。人を集めるだけの行事になっているのではないかと感じている。

また、若い親たちが先輩に相談することが少なく、伝統が続かないこともある。子ども会活動でも、大人の企画で行事が進められてしまい、子どもの発想が生かされず、参加するだけということが多くなっている。

**森山議長** 時間がきたので、山下副議長にまとめをお願いします。

**山下副議長** 昨年度からの会議の中で、实际的・具体的なアクション（取組）でなければ意味がないということが、委員の共通認識であると思う。

今日もいくつかの実践事例が出されたが、取組がうまくいっているところは、潜在化しているものも含めて、地域にある資源を引き出して上手に生かしている。

キーパーソンの発掘や女性リーダーの活用、企業や大学との連携など、地域にある教育資源をうまく活用することで、横の連携が図られた成功事例が紹介された。これまでも「資源動員論」という、地域の資源をどう引き出していくかということについて話をしてきたが、このことは大切なポイントであると思う。

「地域」の捉え方については、小さい範囲の方が自治力や郷土愛など、地域に関するものが身に付きやすいと思われる。取組がうまく進んでいる地域の例を参考にしながら、「どうすれば、どの地域でも実践できるか」という話し合いをしていく必要がある。

この会議でも、継続性、永続性、どの地域にもあてはまるなどの視点で分析することも大切ではないかと考える。対象を絞り込み、目に見える形で具体的に取組んでいくことが大切である。本会議ではその方策を議論していきたいと思う。

**森山議長** 今回の会議結果を十分に活用していただくことを期待して、本日の会議を終了としたい。

（終）